

「わからなさ」や「失敗」から学ぶ ～子どもや保護者とともにつくる発達支援とは～

NPO法人 障がい児・者地域サポートふれあい
理事長 佐々木 浩治

I 自己紹介

1 今の自分は

(現職)

NPO法人 障がい児・者地域サポート ふれあい 理事長

【事業】 就労継続支援B型事業所 ふれあいホーム

日中一時支援事業所 えくぼ

(その他)

- ・ 足寄町発達支援アドバイザー
- ・ 陸別町発達支援アドバイザー
- ・ NPO法人 地域生活支援ネットワークサロン（釧路市）支援
- ・ 暮らしづくりネットワーク北芝（大阪市）オンライン検討会支援
- ・ NPO法人 北海道ケアマネジメントネットワーク 主催事業支援
- ・ よりそいホットライン 専門員 他

2 自分の人生を振り返ってみると、多くの方の支援により、失敗を糧にし ながら歩んできたと感じている

(1) 動きが多く、衝動的に動いていた学校期

- ① 興味のあるものに次々と飛びつき、持続せずすぐにやめていた
- ② 常に体が動き、じっとしていることができなかった
- ③ 国語が苦手で、文章からの読み取りができない状況があった
- ④ 今思えば、メタ認知が身についておらず、何もわかっていないのに、わかったような態度でいた。

(2) 自分の力量もわからずに幼稚園で障がい児とかかわっていた日々

- ① 子どもの育ちがわからないまま、かかわりを続ける日々
- ② 障害特性の知識も乏しく、保護者の思いを理解できない中で、“先生”としての振る舞いをおこなう傲慢な日々

(3) 地域での療育と多くの友人との出会い

- ① 子育てをすることで、子育ての難しさを実感した
- ② 地域で療育することで、共に育ち、共に学ぶことの大切さを実感した
- ③ 多くの友人との出会いにより、支え合うことの大切さを実感した

II はじめに

1 今って、失敗が許されるの

(1) コンプライアンスにより余裕のない現場

- ① 失敗すると、必要以上に追及される現実
- ② なぜ、失敗と見える支援をしたのかは確認されず、失敗したという事実のみに反応する現実
- ③ 価値観によって幅のあるコンプライアンスの基準を一律の枠にはめようとしている現実
- ④ 失敗したと思われる人を排除しようとしているように見える現実

(2) 様々な価値観を受け入れようとしない現実

- ① 「何でも言っていていいよ」といわれても、「何も言えない」雰囲気を感じている現実
- ② 周りとは違う意見や質問等の発言をすると、マイナスの評価されてしまうのではとの不安をもつ現実
- ③ 意見や意思を表明したり、自分なりの取り組みができにくい現実

2 「わからない」って

(1) 発達支援の現場で聞く思い

- ・ 「わからない」とは言えないし、間違っただけとも言えない
 - ・ 話していることが正しいことなのか、間違っているのか、常に不安を感じている
- ⇒ 「専門家なのに、わからないんだ」と思われてしまうのでは、という不安がある
- ⇒ 間違っただけを言って、迷惑をかけるのでという不安がある
- ⇒ 多くの場合、わからなさをエビデンスベースの発達支援に求めがちになり、アカデミックな知識を学ぶ機会を求めている
- ⇒ 専門的な知識を蓄積しても、日々の実践は試行錯誤の連続で、本当にこれでよいのかと自信を持たず、誰かに背中を押してほしいとの思いを抱いている方に出会うことも多い
- ⇒ アカデミックな知識を学ぶことだけでは、わからなさを和らげることに繋がらないと感じている

(2) 現場のわからなさは、「この子の気持ちがわからない」、「どうしてそんな行動をするのかわからない」、「この子、この親にどう関わればよいか、わからない」など

⇒ 「わからなくてもいいよ」、「わかるわけないよ」と言われても「なんとかしたい」、「できるだけのことをしたい」との思いを抱いている支援者は多い

⇒ 「わかっていない」ことに気づいていないため、本人は何も困っていない支援者に出会うことも

→ アカデミックな知識だけでは対応することができない現実

→ 支援者の多くには、「いまこの子に伝えたいことを、どのような言葉、態度で伝えると、より伝わるだろうか」というように具体的に直面したわからなさを共有しながら、支援の糸口を伝えることが必要

→ 「なにがわからないのか」を少しずつでも明らかにしていく中で、「どこまでわかっているのか」を探り、「わかっていない」ことを共有する

→ 「わかっていない」ことを言語化できないため、本人は困っているが周りには伝わらないことも多い。様々なエピソードの中から、わかっていないと思われることを推測し、繰り返し言葉かけをすることで「なにがわからないのか」が言語化できるよう支援を行う

2 「失敗」って

- ・ 失敗するというのはどういうこと
- ⇒ 「保育・療育には正解がない」と言われている中で、何をもって失敗というのかは、個人や組織の考え方によって違う
- ⇒ 適度に失敗を恐れることは、次の失敗を避けるために熟慮することにもつながることから必要な場合もある
- ⇒ 結果ではなく、取り組んだ行為を認めるとすると、「ナイス・トライ」というように失敗といわれるものはないともいえる
- 支援者が必要以上に責められることのない、「失敗」の定義が組織ごとに必要
- 失敗したと思われることをしっかりと分析し、見立てる中で改善すべきことをしっかりと検討する。そのことが、失敗しても立ち直る力、乗り越える力になる
- 失敗は次の支援のための土台をつくるもの、と思えるような心理的な安心感や安全感が組織に必要

Ⅲ 今では、非常識と思われる私の思い

1 障がい児への支援とは、どんどんと出来ることを増やすこと、障害を克服し健常児を目指すことと想っていた

- 私が療育という支援を始めたころは、自閉症は治ると言われた時代。治すこと、できることを増やすことが支援者の役割と考えていた

- 数年後、自閉症が治らないと気づき、どうかかわっていいかわからなくなったときに救われたOTをしている先輩の一言

「この子たちが、歩けるようになったとしても、毎日泣き続けているこの日々で多くのことを失ったら何の意味もないよね。だから、僕は、担当の子どもが泣いたらリハビリをやめて、おんぶをするようにしている。周りから、いろんなことを言われるけど、人を嫌いになってほしくないんだよね」

→ どうかかわるべきかを考えるきっかけになった若いころの経験

→ しかし、かかかわりを変えることのできない未熟な自分

2 支援を受けている子どもや保護者は、支援者と共に問題解決を目指して頑張ることが当たり前とっていた

- 支援を受けている子どもは、嫌なことでも、経験すべきことは最後まで頑張って当たり前とっていた
 - 親も、子どものために障がいを受け止め、子どもに合わせた生活をするのが当たり前とっていた
- ⇒ 傲慢な支援を押し付け、それをこの子のため、親のためと正当化してかかわっていた
- ⇒ また、家庭の生活は関係者にはわからない家族の物語の中にあり、受け止めたいことも、受け止めたくないこともあるということがわからなかった
- 今は、発達的な視点で見立てを行い、支援のあり方を精査することで、やりたくないことは無理にやらなくてもいい支援の方法を考えている
- 親への対応としては、子どもと一緒に生きていこうという思いをもってもらうことを第一に考え、無理に特性等を理解させようとするような支援は行っていない

3 “専門機関”に勤務していれば、それだけで“専門家”と名乗れると 思っていた。

- ・ 支援をしている人や機関は、“専門家” “専門機関” になると思い込んでいた。私も、専門的な知識や経験がほとんどないのに“先生”と呼ばれることが当たり前のようになって感じていた。

- ・ この文章、どう感じますか

「発達障害の子」だの「発達障害児」だのって「子」や「児」がいると考えるのっておかしくないでしょうか？

「発達障害」という「特性」を持ち合わせているとしても、その「子」は「〇〇◇□」というお名前を持った、「唯一無二の子」なのにね？

糖尿病を持ち合わせている佐藤さんや鈴木さんが「糖尿病患者」として語られることはないのに。

いろいろな「センモン機関」を訪れる保護者が「センモンカ」ヅラしている「シエンシャ」に違和感を感じるのは、そういうところからも来ているのではないかといつも腹だたしく思っています。（中川 信子）

⇒ 何をもって“専門家”というか自問自答してきた

→ 今は、支援を必要とする人に寄り添い、支え続けることができる人かなと考えている

IV 穏やかな支援を行うために、子どもの理解を深める

1 特性の理解は、見立てやかかわりの基本となる

- (1) 「特性」とは その人らしさ・つきあっていくもの

 - (2) 特性により課題がみられる場合
 - ① 感覚過敏（五感から受け取る刺激を過剰に感じてしまう状態）が疑われる場合
 - ・ 聴覚過敏（例） → カクテルパーティー効果の機能が低い
 - A 音に集中する、制御機能が低い
 - B そのため、聞こえてくる全ての音に反応してしまう

 - ② 場面の流れが理解できない ⇒ フィルム型理解？ スライド型理解？
 - ・ トラブルが継続する場合に、場面の理解の仕方が課題になる

 - ・ フィルム型理解の場合は、状況を流れとして理解する力が育っているので、場面展開を理解しやすい
 - ・ スライド型理解の場合は、コマ送りのような場面理解のため、どの場面を理解しているかを把握することが難しく、場面展開を伝えても理解につながらない

 - ③ 見え方に違いがあることを受け止める
- 次のスライドをみてください。

2 特性を理解することで、見立てや支援のあり方が変わった事例

(1) 「集団の中にいると話を聞くことができないのですが」

(聴覚過敏が想定される場合)

① 特性が理解できていない時期の対応

- ・ しっかりと話を聞くように、繰り返し声かけをしていた
- ・ 話を聞く経験を続けることで、聞けるようになって信じていた

② 特性を学んだことで、得た新たな視点

カクテルパーティー効果の状況を把握する

⇒ 周りの音が同音量で聞こえているような雰囲気はあるか？

⇒ 音を選択して聞くことができるか？

③ 行動の分析と対応

⇒ どのような環境であれば、話を聞きやすいかを探り、環境を整える

⇒ 音に対して意識が動いた場合には、改めて声をかけるなど

④ 失敗から学んだこと

- ・ カクテルパーティー効果が未熟なお子さんに、聞くことだけを働きかけると、子どもを心理的に追い込み、集団参加や聞くことなどへの拒否を強くすること
- ・ 話を聞くことで、より良い経験ができたという積み重ねがない限り、人の話を聞くことへの意識が育たないこと

(2) 「いつもやってないって嘘をつくんですよね。言い訳ばかりで逆ギレすることも多いんです」

① 特性が理解できていない時期の対応

- ・ 本人が「わかった」と判断できるまで、同じことを何度も話していた
- ・ しつけであり、曖昧にすることはいいことではないと信じていた

② 特性を学んだことで、得た新たな視点

- ・ 言われていることを理解できているのか
- ・ 自分の行為が言語化できて、言い訳を言っているのか
- ・ スライド型の理解の可能性はあるか

③ 行動の分析と対応

- ・ スライド型の場合、状況をストーリーとして働きかけても、理解できないことが多く、謝るなどの行動ができない。また、自分の行為が言語化されていないため、行動した認識がない

→ 行為を言語化して働きかけたり、結果として生じた状況を端的に伝える

→ 「わかった」は「わかっていない」との表現でもあることから、行動を常に見守り、同じことであっても繰り返し伝える

④ 失敗から学んだこと

- ・ 「うそつき」「言い訳ばかりする」など、子どもを否定するような見立てして

(3) 「(ASDのお子さんが) 言うことを理解して行動することが増えたんです。」

① 特性が理解できていない時期の対応

- ・ ことばの理解ができたかと判断していた
- ・ 他の場面ではできない状況でも、理解できているのになぜここではやらないのかと強く働きかけていた

② 特性を学んだことで、得た新たな視点

- ・ ASDの場合、行動がパターン化しやすいことから、ことばではなく場面として行動している可能性がある
- ・ 他の場面でできないということは、ことばを理解できていない可能性がある

③ 行動の分析と対応

理解しているということの意味を検証する

- ・ 本当に理解できているのか、ASD特有のパターン化の中で理解できているように見える行動をとっているのか、偶然行動できたのかを検証する
- ・ しっかりとした理解になるまで、繰り返しの働きかけと行動観察を継続する

④ 失敗から学んだこと

- ・ 理解していると評価する前に、指示に対しての行動や働きかけに対しての行動の仕方を観察し、見立てること
- ・ 理解していると評価してしまうことで、子どもの変化を見失ってしまうこともあるので常に検証すること

(4) 「 いつも、出かけるときに、～しないと～はできないと約束をしていくのですが、いつも場所に着くとできないと約束したことを言い始めて、帰宅時はいつも嫌な気持ちになっているんです。わがままって、どこまで許していいんですか」 (“わがまま” って何)

① 特性が理解できていない時期の対応

- ・ 決めたことは、泣いても、暴れても許さないようにしましょうと伝えていた
- ・ わがままは、簡単に許すと要求が強くなるので、許さないようにしようと伝えていた

② 特性を学んだことで、得た新たな視点

- ・ “わがまま” に見える行動を、特性とアセスメントするのか、わがままとアセスメントするのかを見立てる

③ 行動の分析と対応

- ・ 特性がある場合、“わがまま” というよりも、特性が故の行動である場合が多い。その場面では、要求に合わせることも必要と伝えている。
- ・ 外出の機会であれば、兄弟含めて家族が楽しい経験をすることも重要と考えている。みんなが楽しんで帰れることを第一にした対応で大丈夫と伝えている

④ 失敗から学んだこと

- ・ “わがまま” と表現していた頃、“わがまま” ということばを共有・共感していたとしても、どのように対応すべきかがわからない状況があった。子どもへの丁寧な説明と対応で解決するのか、特性が故になかなか身につかないものなのかをアセスメントし、支援のあり方を検討するようになった

(5) 「今まで食べていたものを急に食べなくなりました。声をかけても、カバンを投げたり、席に近づこうとしなかったり。どうしていいかわからないんです。」

① 特性が理解できていない時期の対応

- ・ 子どもの反応を受け止めることなく、椅子に座らせたり、準備させたりしていた
- ・ 行動をやり遂げるまで、繰り返しの働きかけていた

② 特性を学んだことで、得た新たな視点

- ・ なぜ食べないのかを見立てる

偏食でたべないだけではない理由を見立てる

⇒ 感覚の状況が変わり、口の中に食べ物が入った感覚を受け入れられなくなった
(口の中にある感覚やにおいなど)

⇒ 周りの環境への意識が深まったことで、一時的に食べるという受け入れに躊躇している

③ 行動の分析と対応

- ・ 環境を理解できるようになり、様々な刺激を感じるようになったことが要因であれば、環境への理解が深まり本人から食べ始めるまで見守る
- ・ 感覚系の場合も、本人がその感覚を受け入れようとするまで待つ
- ・ 一番大切にしたいのは、楽しんで食事をしているかどうか。好きなものだけでも、楽しく食べられればよいとして対応している。過度の偏食指導は行わないようになった

④ 失敗から学んだこと

- ・ いろいろなものを食べられるということが重要と思うのは、大人の一方的な思いである場合もある。特定のものであっても、楽しく、おいしそうに食べられればよいと思うようになった

(6) ヤングケアラー

① 定義

本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っていること。責任や負担の重さにより、学業や友人関係などに影響が出てしまう子どもたち

② 最近、出会ったヤングケアラーと思われるタイプ

1) 保護者に精神的な疾患があり、保護者の精神的な状況に合わせた反応をしている。

- ・ 保護者が不安定な時は、息を潜めて生活している
- ・ 保護者のかかわりに一貫性がなくても、穏やかに受け止めようとしている

2) 親が安心する行動や反応を示し続ける

- ・ 自発的な行動は少なく、親の意図に合わせてようとする
- ・ 家の中で親が安定するための行動をとり続ける

- ③ 「母は、高次脳機能障害及び様々な精神症状（対人恐怖等）や希死念慮が強く、こどもが安定した家庭生活を送ることが難しい状況
こどもは、場面に合わせる力が高く、大人の雰囲気を感じ取り行動している。とても“いい子”的な行動ができる
- 1) 特性が理解できていない時期の対応
 - ・ 子どもをいい子としてとらえ、何の問題性も感じなかった
 - ・ 特段の配慮を必要とする認識は持てなかった
 - 2) 特性を学んだことで、得た新たな視点
 - ・ こどもの中に“ヤングケアラー”的な特性を感じることで、“特定の他者”的な大人が存在するか否かを検討する
 - ・ 母親の精神状況により承認の基準や生活上の優先順位が変わるため、行動の中に自発的なものがあるかどうか検討する
 - ・ 選択することや自分の思いや意思を表明することができるかどうか検討する
 - 3) 行動の分析と対応
 - ・ “特定の他者”的な大人の存在が確立するためのかわりを行う
 - ・ いい子ではない反応やわがままな反応が出たときに十分に認める
 - 4) 失敗から学んだこと
 - ・ いい子と見立てることが、心理的に子どもを追い込んでしまうことを学んだ。子どもらしく育つということについて検討するようになった

(7) 愛着障害について考える

① 愛着障害とは

親などの特定の養育者との愛着形成がうまくいかないことで現れる困難の総称

② 愛着障害による影響（青年期等の状況）

- ・ 子どもに起きる愛着障害として
「反応性愛着障害」と「脱抑制性対人交流障害」

③ 愛着障害につながるかかわりとは（代表例）

- ・ 心理的な虐待といわれる“毒親” “ヘリコプターペアレント” といわれる過干渉的なかかわり

- ④ 「私に暴言を吐いたり、叩いたり。私の心も折れてしまうんですね。私ではない保育士の方が、いいような気がしています。ちがいますか。」
- 1) 特性が理解できていない時期の対応
 - ・ 人をたたくことはいけないことなので、強く禁止するように伝えていた
 - ・ 保育士の心情が理解できず、励ますことしかできなかった
 - 2) 特性を学んだことで、得た新たな視点
 - ・ 信頼感が芽生えてきているからこそ出てくる“再現反応”だったり、信頼できる大人（特定の他者）として認識される関わり方ができているからと伝えている
 - ・ “わがまま”に見える行動をしっかりと受けとめる
 - 3) 行動の分析と対応
 - ・ 子どもの行動を安定して受け止め続けることは難しいこと。愚痴を言ったり、担当を変わってもらったりしながら、一人で抱え込まず、気持ち的に追い込まれないようにしながらかわりを続ける
 - ・ 子どもが経験する家庭生活は、限られた環境下での生活であることが多く、“普通の生活”といわれてもそれを経験していないために理解できていないことも多い。“普通の生活”を経験させる
 - 4) 失敗から学んだこと
 - ・ 愛着障害児への対応は難しく、社会的なルールを押し付けたり、集団行動への参加を働きかけるだけでは、反発心を招いたり、心の育ちに影響を与えることも多い。安心した人間関係の形成と穏やかな集団参加へのあり方の検討を続けることの必要性を学んだ

⑤ 「めんどくさい」って言って、やろうとしないんです

1) 特性が理解できていない時期の対応

- ・ できるのにやろうとしない子と思っていた
- ・ 本人が取り組むまで、声をかけ見守っていた

2) 特性を学んだことで、得た新たな視点

- ・ 虐待的な環境で教えられたり、経験していない可能性があると考えた
- ・ “めんどくさい” は、「わからない」、「やってもできない」との訴えかもと考えるようになった

3) 行動の分析と対応

- ・ 何ができて、何ができないのか、をアセスメントする
- ・ できないことは一緒に取り組み、できた喜びを伝える
- ・ ～ができるんだから、～もできるとは思わないことを大切にした

4) 失敗から学んだこと

- ・ 一般的な生活経験がないが故に、できないことがあることを学んだ。「めんどくさい」を子どもからのメッセージとして受け取る柔軟性を学んだ

⑥ 歩んできた生活とは

家に居場所がなく、中学生の頃から家に寄りつかない状況。「家にいないで、どこにいたの？」と聞くと「てんてん！」と

- 自分の認知特性を知るために希望して知能検査を受け、軽度の知的障がいといわれる
 - 「学校に行ってた時、わからないことが、わからなかった」と。先生からは、「わからないことがあったら、にこにこしてたらわかるようになるから」と言われ、その通りに生活していた（本人 談）
 - 家庭環境の課題もあり、支援施設へ。依存や摂食障害等の2次的な課題を抱えながら就労、結婚、子育て、離婚、そして、結婚
- わからないと思われることを、支援者が丁寧に伝え続けたことで、「わからない」ということ、「わかることが嬉しいこと」が理解できるようになった
- 信頼できる大人（特定の他者）との出会いや特性に応じた働きかけにより、困った時は相談をしながら自立への一歩を踏み出す。
- 自分の特性を理解し、苦手なこと、できないことを他者に伝えることができるようになったことで、仕事に安定感や意欲がでてきた。

V 保護者を支える発達支援

1 情報として

- (1) 氾濫する情報と不安なことは“検索”することで情報を得ようとする環境
- ① 正しい情報を得るためというよりも、自分が安心できる情報が得られるまで“検索”し続けている。
 - ・ 子どもの反応を理解できない、どう対応したらいいのかわからない不安が、“検索”に向かわせている
 - ② 子どもの状況よりも、“検索”で得た情報に合わせて行動を理解したり、かかわろうとしている。
 - ・ 情報を得る機会が、人からネットと変化している。
- 何が正しい情報なのかを検証することができず、情報の氾濫が親を不安にさせている。

2 障がい等に対する向き合い方

⇒ ショック ⇒ 否認・拒否 ⇒ 怒りと哀しみ

⇒ 原因究明と解決策探し ⇒ 抑うつ状態

- ・ この流れを経て、“障害受容”をしていただくことが保護者支援と思い込んでいた
- 今、私が一番苦手な言葉が“障害受容”
- 保護者には、保護者の思いがあり支援者の思う経過を踏まないことを学んだ

3 わからなかった、保護者の具体的な心情

- ・ なぜ、我が子にレッテルをはるの
- ・ 我が子にだけはという落胆
- ・ 「明日」になれば変わるのではないかとの思い
- ・ 気づいているということと診断がつく子どもであるという理解は異なる

4 わからなかった、親子関係を取り巻く様々な環境要因による影響

- (1) 親が経験した養育事情（父母の育てられてきた歴史等）
⇒ 子どもとの関係性をどのように築いていいのかわからないこともある
⇒ 親の生活経験や性格・価値観・家族の文化・地域性によって子育て観が異なる
- (2) 経済事情（夫の失業、経済的困窮 等）
- (3) 夫婦事情（虐待、DV 等）
- (4) 家族事情（結婚後の祖父母・兄弟関係 等）
- (5) 地域事情（近所との関係 等）

5 保護者の反応から本当の姿なのかを分析することの必要性を学んだ

(1) 「～さんは、明るくて元気だよね」

⇒ 明るく振る舞っている人じゃないの？

(2) 「お子さんのことを伝えた時に、しっかりと認めてもらえると安心だよね」

⇒ 本当に認めているの？

⇒ 拒否することに自信がないから、受け入れている雰囲気なのでは？

(3) 「お母さんから相談にきてもらえると、安心して話せるよね」

⇒ 本当に、自分から相談にきたの？

⇒ 否定してほしかったんじゃないの？

6 経験したケースから

- (1) 「親は、子どもの状況を認めず、拒否的な反応なんです。支援は、親がお子さんの状態を受け入れることから、始まると思うのですが」
 - (2) 「みんな 私を責めるんです。だれも私のつらさをわかってくれないんです」
 - ・ 親は否定的なわが子の状況を知らされていることが多く、現状を受け止めにくくなっている
 - ・ なぜ、個別的な支援を必要とするのか、また、その支援によってどのような状況になるのかを伝えることで、共感的な理解が得られるように対応する
- 自分を受け止めてもらえる人を探したいと思うほど、追い込まれている場合も。なぜ、精神的に追い込まれているように見えないのかを検証することが次のステップにつながることも

(3) 保護者の想い その1

母「いつも、頑張ってますねと言ってくれますよね。でも、大人がそんなに頑張ってるねって褒められることはないですよ。私は、褒められると全然できていないから、そんな声かけをするのかなって思っています。おかしいですか。」

私「そう思っていたんだね。そんな思いをさせてごめんね。」

母「何か、普通に声をかけてくれるだけでいいんです。普通ってよくわからないけど。どうしたらいいんでしょうね」

私「私たちは、褒める声かけに慣れてしまっていて、その人がどう思っているのかに思いがいたっていなかったかもしれないね。気をつけて話をするね」

→ ハッとさせられることばでした。

⇒ 受け止めること、共感すること、励ますこと、認めること、褒めること どのような対応がその方に必要としているのかを常に考えなければと思っています。

(4) 保護者の想い その2

私「お母さん、お子さんが発達支援を受けることの願いは何ですか。」

母「願いが必要ですか。私は、健診で発達支援に行った方がいいって言われたので来ているだけです。」

私「そうなんだ。でも、ことばがゆっくりで心配で、応援してほしいとか、落ち着きがないから、少し動きが少なくなればとか、何か気になることはないかな」

母「何も、ないです。楽しく遊んでいれば、それでいいです。」

- 健診で勧められ、主訴がなく発達支援を利用する方々がいます
- 拒否したり、反発することもなく発達支援を利用してきるが、動機がないことから、保護者との関係性を構築することが難しい状況となっています。
- ⇒ 保護者との関係性を深めることやお子さんの支援のあり方を共有することも難しさを感じている。

(4) 保護者の想い その3

「個別の支援を始めたことで、子どもの経験が増え、いろいろなことを楽しんでいます。その成長をお母さんも喜んでいるのですが、家では違う悩みが出てきたと話しています。」（保育士）

「成長によって反応が変わることで、今までと違う反応をうまく受け止められないことが多いんだよね。成長による反応なんだけど、喜んでばかりはられない心理になるんだよね。成長したことを喜びながらも、お母さんを慰労することが大切だよね。」（私）

「成長に伴って、お母さんに抱き着くことが多くなってきました。今まではお迎えの時に、もっと遊びたいのか保育士に抱き着いたり、違いところに行こうとしたりしていたのですが、今はお母さんに抱き着いていて、お母さんが嬉しそうな雰囲気なんです。」（保育士）

「多くの場合、保育士等に子どもが甘えると、安心するという気持ちの反面、自分に示さない反応があると、自分のかかわり不足や受け入れ方を思った以上に反省する方がいるんだよね。今の嬉しそうな反応を大切に見守ってください。お母さんが、子どもに向き合おうとする素敵な反応ですね」（私）

⇒ 母の心理的な葛藤。どのように受け止めていますか。

→ ことばにしていけない感情を支援者の感性で受け止めることが大切

→ 成長するが故に出てくる新たな反応をどのように見立て、保護者に伝えていくのか、できることを喜ぶだけでは解決しない心理がある

VI まとめ

1 支えあう仲間の中から育つ想い

僕たちは、僕たちのために、そして集まった多くの仲間のために、走り続けています。

Children Firstという言葉は、今も僕たちの心を支えています。この哲学は、今、目の前の方々を大切に、という思いへ繋がっていきました。僕たちが向き合い、大切にしてきたのは、「発達障害」なんかではなく、一人一人の子どもが、親が、そして僕たちが、どうしたら日常を豊かに生きられるか、という生き甲斐探しのようなものだったのかもしれない。

その意味で、本当に「生まれてきてよかった」という思いは、かれらだけでなく、僕たちの思いでもあります。そのまえに、「あなたたちに出会えてよかった」という思いが、僕たちにはありますが。

それでも、僕が冒頭で述べた、「なかなか取れない疲れ」とは、ここまで走ってきて、まだ見えぬ、まだ出会っていない方々があまりにも多いという当たり前のことを前にして、僕は、ぼんやりとあがき、うっすらと不安になり、ちょっとだけ責任を感じているのです。

さて、これからの10年、20年、僕たちは、どこへ向かっていこうというのでしょうか。それは楽しみでもあり、心地よい疲れでもあり、果てることのない恍惚と不安がない交ぜになっている世界かもしれません。でも、それも仲間という安心があるからです。

そこに、キミがいる限り、僕（たち）は走り続けたい。ただ、それだけなのかもしれません。

みんな！

また会おう、また飲もう、また歌おう、また笑おう、また泣こう。

そして、まだまだ、歩もう。歩み続けよう。

必ず来る、明日のために・・・・・・・・

(ともだちだよね なかまだだよね Part 2

～これからもずっと～ より 田中 康雄氏)

2 子どもたちの目標とは

(村瀬嘉代子氏「こころの科学 163号」より)

「自分の意志を明確に言語化して伝えることが難しい年少の子どもや発達に重篤な障害を持つ子どもに対して、目標をどこまで相手にわかるように伝えて共有できるか、実際にこれは難しいことであるが、それだけに教育する立場の者は、目標としていることに無理はないか、本当にそれは適切であるかについて、いろいろな角度から検討を怠らないようにしたい」

→ ことばがあることで、理解されにくい子どもたちがいる。表出されている思いや表出されていないけれど抱えている思いをどのように受け止め、見立てのかが大切なこと。ことばに左右されないアセスメントと見立て、かかわりが必要と感じている

3 「地域で生きる」ことを支援する

「障害を持つ人」が家庭や地域を離れ、特別につくられた施設や学校で生活するのではなく、生れたその地域で家族や住民とともに過ごし、教育を受け、可能なら就労もして充実した生涯を送ることを支援するのが特殊教育や障害者療育・福祉の理念であるということが、ようやくわが国でも定着しつつある。しかし、「障害を持つ人」のニーズは相互に大きく異なっているため支援のあり方が個別的事であることを要し、他方で個人が同時的・継時的に持つ複数のニーズへの適切な対応のためには、関係者・関係機関のネットワークがどうしても必要になる。このように表裏の関係にある「支援の個別化」と「ネットワークの形成」を「障害を持つ人」の居住する地域においてどのように実現していくかということが大きな課題だと考えてきた。

(教育と医学. 1999. 巻頭言. 伊藤則博)